

MINAMI KYUSYU NO JOKAKU

南九州の城郭

第1号

南九州城郭談話会報

平成8(1996)年3月5日発行

南九州城郭談話会発足に際して

三木 靖

この度、鹿児島、宮崎、熊本で城郭の発掘調査に従事している者の働きかけで、南九州城郭談話会が結成された。

熊本県下益城郡松橋町の竹崎城跡(昭和49年～)、鹿児島県鹿児島市の川上城跡(50年～)、宮崎県宮崎郡清武町の清武城跡(51年)に始まる城郭の本格的発掘と、各県教育委員会による城郭跡分布調査の実施が本会結成の契機のひとつになっている。いずれも南九州に開発の波が押し寄せたための緊急調査で、この担当者も百人のオーダーに達し、じっくり取り組むだけのデータが蓄積されてきた(知覧城跡が城郭跡として平成5年国指定になった。南九州では久しぶりの快挙で、緊急調査を活かしきった発掘担当者を含む行政の積極行動のたまものである)。

一方、城郭の縄張や歴史を主とした「日本城郭大系」20巻が昭和56年完結、59年から全国城郭研究者セミナーが始まり、縄張調査等の手法と発掘調査の手法との切磋琢磨の場となり、南九州からの参加者が増えたことも本会結成のもうひとつの契機である。

また、学校教科書、通史、歴史叢書、専門書も城郭を取り上げることが多くなってきた。

もちろん、このような専門性に左右されない城郭愛好家も歴史ブームと共に増え、南九州も例外ではない。地元紙も数年に一回程度は南九州城郭シリーズを掲載している。

今回、「城郭に関心のある方」は誰でも入れる談話会をと提案したのは、この状況を考慮したためである。例会は、創立の会合と同様、3県にまたがって実際に城郭跡を見て、その城郭に関するレポートを聞いて、それぞれの城郭を正確に知ることが目標にしたい。もちろん、情報誌を読むだけの会員も歓迎したい。

既に、会の幟(のぼり)もできているので、さらに例会の充実、講座・講演会の開催、勉強会・研修会・研究部会の設置、機関誌の刊行、城郭分布図・辞典・写真集の作成、城郭サロンの開設、国内外城郭跡の探訪、城郭関係者との交流等々をしたいと夢は膨らむが、まずは会員の意向のもと、南九州の城を楽しみながらたくさんの城と出会う場として継続発展させたいと考えている。

第1回見学会(大口市関白陣跡)



◆◆ 設立総会報告 ◆◆

平成7年12月3日、大口市で南九州城郭談話会が発足した。会場が大口市という地の利もあり、鹿児島県、さらに宮崎、熊本県からも城の愛好家25名が集まった。

午前中は曾木の関白陣跡を見学した後、午後からは場所を大口市ふれあいセンターに移し、総会ならびに第1回例会が行われた。

総会では、新東晃一氏の司会進行のもと、開会のあいさつに先立ち、新納堯英教育長から大口市での発足会開催にあたり感謝の言葉をいただいた。この後、三木靖発起人代表があいさつ、「記念すべき大会を熊本・宮崎・鹿児島県境の地で開催できたことに大きな意義がある。」と述べた。

この後、上田耕から発足の経過と会の主旨が、下鶴弘氏からは会の規約(案)の内容についてそれぞれ説明があった。続いて質疑応答、役員選出の後、新役員を代表して宮崎県の北郷泰道副会長が、「宮崎では城郭の悉皆調査が行われ、若手を中心として研究の盛り上がりを見せた。今回の会の発足によってさらにはずみがつき、互いに連携をとりながら、南九州の城郭研究が進展していくことを期待したい」と閉会のあいさつを締め括った。

この後、第1回例会に移り、重久淳一氏の司会進行で三木靖会長と上田耕が発表、これに対するディスカッションが活発に行われた。

(上田 耕)



設立総会(大口市ふれあいセンター)

第1回見学会 関白陣跡遺構説明



南九州城郭談話会規約

- 1 本会は南九州城郭談話会と称する。
 - 2 本会は南九州を中心とした城郭史の研究調査を目的とする。
 - 3 本会は上記の目的を達成するために下記の事業を行う。
 - (1) 城郭や遺跡の発掘調査、博物館等の研修視察等
 - (2) 城郭の調査・研究および測量等。
 - (3) その他本会の目的達成に必要な機関誌『南九州城郭研究』、会報『南九州の城郭』等の編集および発行、研究発表会・講演会の開催等。
 - 4 本会の目的に賛同し、所定の会費を納めた者を以て会員とする。
 - 5 会費は、入会金500円、一般会員年額1,000円とする。
 - 6 本会は次のような組織とする。
 - (1) 会長 1名、(2) 副会長 若干名、(3) 幹事 若干名、(4) 事務局長 1名、(5) 会計 1名、(6) 監査 2名
 - 7 上記の役員は、会員の中から総会において選任する。なお、必要に応じて顧問を置くことができる。
 - 8 事務局長・会計は幹事の中から、監査は会員の中からそれぞれ選任する。
 - 9 会長・副会長・幹事の任期は2年とする。ただし再任をさまたげない。
 - 10 会長は本会を代表する。
 - 11 本会は年1回の総会を開催し、例会を実施するものとする。なお、例会の内容については会員からの要望等に基づき幹事会で決める。
 - 12 会費収入は本会の経費にあてる。
 - 13 本規約の改正は幹事会において立案し、総会で承認を得なければならない。
- 付則 本会の規約は平成7年12月3日を以て発効する。

第1回例会発表要旨

1 関白陣について

三木 靖

大口盆地には、中世の城郭が多数築かれ、大口城がその中でも中心的な存在であった。

戦国大名島津氏を制圧した秀吉は、天正15(1587)年5月、川内川を遡って肥後へ移動しようとして平佐城から山崎城、鶴田城を経由し、薩摩最後の宿营地に大口城を使いたいと思った。大口城を使うのが常識であった。が、秀吉は大口城から北8kmの曾木天堂ヶ尾に陣城を築き宿营地とした。彼は大口城にいた新納忠元を威圧するために、大口城を眺望できるこの場を選んだので付城でもあった。

当時、秀吉は関白で、最高位の公卿だったから、城郭は豪華なものだった筈である。その跡が天堂ヶ尾と「関白陣」と呼ばれている。

江戸末期の『三国名勝図会』は当城を「独立した丘の頂上の東西25m、南北67mの平坦な面で所々に石垣が残り、その中に秀吉の御輿を置いた(脇に松が植えられ)1.5m四方の盛土があり、南90mの原野に2箇所家臣の宿所を築き、更に南110mの水勢盛んな泉を秀吉勢が使用した」とし鳥瞰図を付載した。が、それから後には、丘の頂上にだけ関心が集中してきた。

平成5年大口市教育委員会は、丘の下部から山腹にかけて(標高240m以上)全長4km(関白陣のみ)の土塁・石塁類似の遺構があり、頂上側には溝を伴い大手口相当部分もあると発表した。この遺構は大がかりなものであると思われ、また、後代に使用されたこともあり、今後慎重に調査されなければならぬが、秀吉の威厳を示すための軍事(土木)施設として、頂上だけでなく山腹と麓を含む関白陣と天堂ヶ尾の全域を調査して、関白秀吉の施設として、陣城としてまた、大口城の付城の施設として正当な位置づけが期待される。

2 国指定 知覧城跡の現状と保存・活用

上田 耕

知覧城跡はシラス台地に造作を施した南九州の典型的な中世の山城である。

平成2年に、地域のふるさと創世事業の一環として知覧城跡の整備が始まった。しかしその事業計画は、中世山城の保存整備とはほど遠いものだったために中断し、全面的に見直されることになった。

平成4年、城の主郭の発掘調査が行なわれ、16世紀を中心とした多くの遺構や遺物が出土、これを機会に「中世知覧城からのメッセージ92」と題した現地説明会を開催、話題をよんだ。そして、平成5年5月、城跡全体約41万㎡中、約23万㎡の範囲が県内では戦後初めて城跡の国指定となった。

ところが平成5年9月に強力な台風が襲った。さいわい土塁や虎口などの遺構についてはそれほど影響はなかったものの、城の大部分の斜面が滑落してしまった。その後、城郭や地質・建築史などの専門家を中心とする保存整備委員会が設置され、現在、国県の補助で城跡の保存管理計画を策定中である。現地では定期的な草刈りと清掃を行っており、見学者に対して無人の資料ポストも設けてある。

当面は雨にもろいシラスの城跡の遺構をどう保護していくかが最大の課題で、中でも排水施設の設置が急がれている。この巨大な城跡の保存整備については知覧城跡にとどまらず、南九州の城跡全体に関わる重要な課題である。また、知覧城跡を市民のための歴史の広場として忠実に当時を再現し保存活用するためには、文献資料の調査や発掘調査を行い資料の蓄積を図らなければならない。しかし、保存・整備・活用とは簡単にいっても多くの課題を抱えている。

◆第1回見学会◆

関白陣跡(大口市)

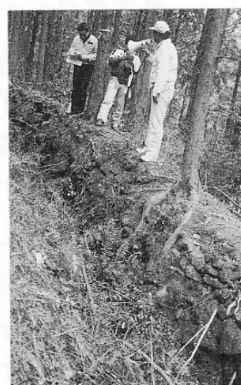
記念すべき「南九州城郭談話会」の第1回見学会は、北薩摩の「関白陣跡」巡検を実施した。大口市は、南九州の中心として、熊本県南部や宮崎県、鹿児島県内から集うには適地であった。各地から25名が午前10時までに関白陣登り口に集合し、見学会は開始された。

関白陣跡は、平成5年12月、県の多目的保安林総合整備事業中、山腹を巡る土塁・石塁遺構の発見で再び注目されるようになった。12月25日、三木会長や新東が現地確認を行い、若干の不明瞭な部分はあるが、三国名勝図会にいう「曾木天堂ヶ尾豊関白宮」を裏づけるものと判断された。全国的に報道され関心が持たれており、南九州城郭談話会の見学会・検討会には最適地であった。

見学会は、国道267号から上がった陣営入り口付近の空堀とその外側に付随する土塁・石

塁の巡検から開始した。関白陣の中心的遺構となる土塁・石塁跡は、山頂側に幅約2m×深さ0.8~1.2mの溝(空堀)を、その外側には基部約2m×高さ0.8~1.2mの土塁・石塁を山腹の約2kmにわたって巡らしている。空堀には水が溜まらないように暗渠も備えてあり、通路として使用されたことが伺われる。地肌に岩石が多く、空堀掘削時に多量の岩石が掘り出されて、その岩石を利用した野面積みが見られるところもある。また、この空堀と直行して陣中心の山頂を結ぶ連絡道(空堀)も数カ所確認されている。

(新東晃一)



石塁遺構

次回見学会紹介

次回見学会は、始良町の下記山城跡で行います。ここで、当日の見学コースと見所について紹介しましょう。

1 岩剣城跡 始良町平松字山ノ口

集合場所である重富小学校は、島津義弘が築いたという「平松城」(町指定史跡)にあります。正面の石垣に向かって、右手に屹立した天然の要害が岩剣城跡です。

当日は西側の登り口を利用し、重富小前から城跡の山腹までは、車で移動します。歩き始めてから30分ほどで頂上の曲輪に着きます。

長さ約300m、高低差約40mの尾根伝いに曲輪・空堀・土塁などの遺構が残っています。南東の曲輪にある高さ7mの土塁は必見です。

参加される方は、必ず手袋と運動靴を用意して下さい(難攻不落の手強い城ですよ)。

*山登りに自信のない方は、重富の「麓」集落の探索をおすすめします。

2 建昌城跡

始良町西餅田字建昌城

重富小から建昌城までは車で移動します。県道十三谷線を通り、所要時間は約10分です。

城域は丘陵の頂上部だけで約10町歩あり、西側3町歩の旧養鶏場を駐車場とします。

城内には長さ240mの馬乗り馬場と呼ばれる大きな空堀が東西に走っており、この空堀を中心に東の大手口から順に西へ各遺構を案内します。城内は、比較的平坦ですので、どなたでも見学できます。

特に、土塁に囲まれた主郭部は2ヶ所もあり、その意味や位置付けはまだ定まっていません。会員の皆さんのウオッチングによって解明されることを期待しています。

なお、山腹の遺構については、時間の関係で割愛させていただきます。(下鶴 弘)

*見学会は、午後の会場である始良町中央公民館までご案内して解散し、昼食となります。その後、引き続き、第2回例会が開催されます。

◆◆第2回例会発表要旨◆◆

・高原城跡について

高原城跡は、宮崎県北諸県郡高原町に所在する。天付川を谷とする南側の台地上に立地し、北・東・西の三方は険しい谷に囲まれた城である。

現在は、本丸跡と称されているところが墓地となっており、国道221号線と運送会社建設のため、半分ほど削られた他は大半が山林となっており、全体的に残存度は高い。

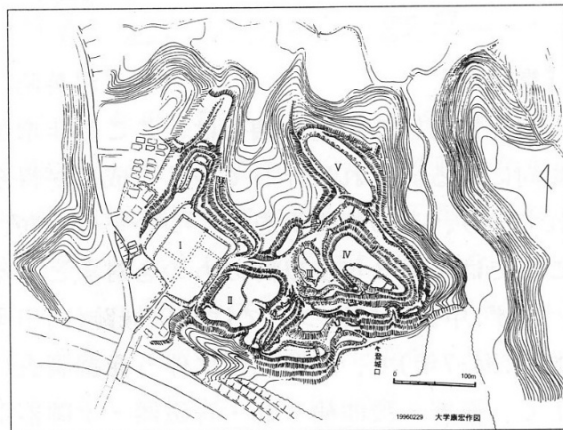
高原城は、永禄年間に島津家家臣梅北掃部の築城によるとされている。その後伊東義祐の領地となり、伊東四十八城の一つと数えられた。機能的には、島津領飯野城に相對している小林三ツ山城の後方支援基地的役割を果たしていたが、天正4(1576)年の高原城攻略の際、島津義久自ら最前線の三ツ山城をぬいて高原城に迫っていることから、軍略上、かなり重要な位置を占めていたことが窺える。

大きな曲輪は、四区画残っており、馬蹄形に配置されている。また、それぞれの曲輪の周りには、通路を兼ねた幅10m前後の空堀が巡る。知覧城跡と同様の、南九州特有の台地立地型城郭である。

各曲輪の出入口は、大方は原形を保っており、II曲輪南西部には、明確な枡形虎口と呼べるものが残っていた。現在、明確な登城口一ヶ所が城の南東部で確認されている。当時の交通路は、東側の谷から下り、谷間を通ってぬけるというものであった。そのために登城口をはじめ、その周辺部に帯曲輪等を配している。さらに土塁を伴った門の上には、見張り台のような突起や武者溜りと見られる窪み、下からは見ることのできない連絡用の通路や曲輪などが存在する。

以上のことから、かなり厳重な防御のため、島津軍が攻めあぐねたという文献の記述が、遺構の上から立証できた。(大学康宏)

高原城跡縄張図



・建昌城跡について

建昌城跡は、鹿児島県始良郡始良町に所在する。別府川と思川に挟まれた丘陵部の南東に位置し、南には九州自動車道桜島サービスエリアがある。北西部には大規模な切り通しがあったそうだが、今は県道十三谷線の拡幅により原形を止めていない。

建昌城は、もと瓜生野城と呼ばれ、室町時代の豊州家島津氏の居城であった。築城は享徳年間(1452~4)といわれ、初代季久が長男忠廉とともに移り、文明18(1486)年まで始良地方に威勢をはっていた。現在城跡には土塁で方形に囲った曲輪が残っており、青磁・白磁・石臼などの出土品からその生活ぶりがうかがえる。その後しばらく歴史の舞台から姿を消すが、近世初頭の慶長5(1600)年に、島津氏の本城候補地にあげられ、家久は建昌城に執着していたようだが、残念ながら結局実現はしていない。

このような歴史的経緯は、縄張りの上にも反映されている。どうぞ期待！(下鶴 弘)



建昌城跡の空堀

◆城郭研究の現状◆

【宮崎県】

米澤英昭

本件における城館の調査は、ここ数年増加傾向にある。それに伴って多くの成果が得られており、その調査例をいくつか挙げるが、ここでは平成3年度以降のものを対象とする。

まず、中世山城については江田城跡(門川町加草:H4・7年)で、道路拡張に伴う発掘調査により、横堀・腰曲輪や瓦・青磁器・土師器が検出されている。また、戦国期に秋月氏の居城としても使用され、14~17世紀初頭のものとして目されている櫛間城跡(串間市大字西方:H3~6)では、工業団地造成に伴う発掘調査が行われ、内堀・空堀・柵列・腰曲輪・土塁等が確認されている。さらに、代々北郷氏の居城であった都之城跡(都城市都島町:H5・7)でも各曲輪(中之城・池之上城)で調査が行われ、巨大な堀・軽石積みの石列・井戸、舶載陶磁器・土師器・鉄製品等が検出されている。その他にも高平城跡(日向市塩見:H3~4)、穆佐城跡(高岡町小山田:H4)、園田城跡(えびの市榎田:H3)等数多の重要な山城の調査が行われている。

次に中近世城郭では、延岡城跡では(延岡市本小路:H4~7)で開発に伴う度重なる調査が行われており、瓦だまり・石列・工房跡、陶磁器・土師器・古銭等の各遺構・遺物が検出されている。同様の調査例として高鍋城跡(高鍋町南高鍋:H4~5)、佐土原城跡(佐土原町上田島:H3・5)があるが、高鍋城では近世初頭の遺構・遺物が、そして佐土原城では、調査後当該地に近世の居館を復元し、現在は資料館となっている。

また、上記以外に、平地城館の調査も行われており、上大五郎遺跡(都城市丸谷町:H5)の二重の溝に区画された居館址、上ノ園第2遺跡(同早鈴町:H5)の庭園遺構等を有する屋敷跡がある。



都城市上大五郎遺跡

【熊本県】

鶴嶋俊彦

古代 律令政府によって築城された鞠智城は昭和42年以降断続的に発掘調査が実施されており、現在も史跡整備を目的とした調査が継続中である。八角堂2棟の外、多数の礎石建物、掘立柱建物が検出されている。

中世 中世城跡は、昭和53年の全県下の中世城跡を対象とした「熊本県の中世城跡」が刊行されて後、その周知が広く行われることとなった。調査は開発に伴うものと確認・整備に伴うものの二つに分かれる。前者には、山田城・高城(山江村)、奥野城(多良木町)、蔵城(錦町)、矢黒城(人吉市)、龍田陣内城館(熊本市)など道路建設による調査が多い。後者は指定史跡の整備や町村史編纂、近年の地域振興目的の調査での件数も多く、縄張図作成のみの調査も実施されている。史跡整備の調査では田中城(三加和町)、宇土城跡西岡台(宇土市)が継続中である。町村史編纂などの関係では稲佐城・木葉城(玉東町)、大津山城(南関町)筒ヶ嶽城・梅尾城(荒尾市)、西付城・城村城(山鹿市)、堅志田城(中央町)、河内浦城(河浦町)、高山城(深田村)などがある。県教育委員会発行の「奥野城跡」、「高城跡」は球磨郡内の主要遺跡をまとめており、「龍田陣内城館」も県内の主要な城跡の縄張図を掲載しており参考になる。

近世 史跡整備のための調査が多い。人吉城、宇土城、熊本城など現在も継続的に調査中である。佐敷城(芦北町)は廃城の様子を良く残し、一見の価値がある。

◆◆発掘調査レポート◆◆

上城・詰城跡

新町 正

上城・詰城跡は、鹿児島県日置郡市来町大里に所在する。現在、上城部分は畑として使用され、詰城部分は、大部分が杉林、一部畑や墓地として使用されていた。平成3年度、この大里地区に県営農村活性化住環境整備事業導入が検討され、上城部分が住宅団地、詰城部分は運動公園として利用する計画が持ち上がった。そこで、平成5年度に確認調査を実施する運びとなった。確認調査では上城部分より、縄文時代早期の円筒形条痕土器、縄文晩期の入佐式土器、13世紀頃の土師器などが出土した。詰城部分からは、土師器・13世紀頃の玉縁口縁白磁、14～15世紀頃の青磁碗(蓮弁)などが出土した。遺構としては、土塁・堀切・柱穴・土坑などが確認できた。その後、開発関係機関との協議が再三なされ、平成7年度に、用地買収の済んだ詰城から全面調査を開始した。

調査に入るにあたり、堀切などの詳細な確認と新たな遺構の検出、地層の状況、城構築の状況などを確認するため、地下レーダー探査を実施した。その結果、V字状をした堀切の断面及び複数の落ち込みを捉える事に成功。その結果を踏まえ20mごとにグリッドを組み調査を開始した。包含層中からは旧石器(1万5千年前)、縄文(9千年前)、弥生(2千年前)、歴史時代(12～16世紀)の遺物が出土した。遺構(柱穴・土坑)からは、土師器・内黒土師器・玉縁口縁白磁・白磁端反碗・白磁碗などが出土し、これらはすべて12～13世紀ごろと考えられる。また、地鎮祭の跡と考えられる土壇からは、土師器の坏が伏せた状態で、皿は重なった状態で検出された。また、耳皿状の土師器坏も出土しており、遺構中より出土した遺物を総合的に判断して、これらの遺構は、13世紀の前半頃に構築されたと推定できる。

やぐらだい 櫓台 1995年の動向

平成7年度も際だっているのが発掘による成果であった。中でも大分県玖珠町の角牟礼城跡からは織豊系穴太積みの高石垣や二層の櫓門跡が検出され、城郭史上画期的な発見となった。玖珠町では「よみがえる角牟礼城」と題した町づくりフォーラムを開催。南九州からも「知覧城跡と町づくり」の発表があった。

都城市中町遺跡では、鎌倉時代から戦国時代にかけての掘立柱建物跡約30棟や輸入陶磁器等が発見され、市街地の町並み形成が400年近く遡ることがわかった。これに関連して福島金治氏は16世紀中頃の戦国段階には志和地城をはじめ都城と周辺の城にはすでに町が形成されていたことを文献資料から明らかにした(市史編さんだより第2号 都城市1996年)。これを機に一層南九州の戦国期城下町論が活発になることを期待したい。(上田 耕)

《1995年発行の新刊・報告書案内》

城館に関する出版物や論文の一部(鹿児島を中心に)を紹介します。

1. 名嘉正八郎『南日本文化研究所叢書20 グスク(城)の姿』
2. 木島孝之「鹿児島城の縄張り構造と島津氏権力との相関」『中世城郭研究』第9号
3. 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(13)『平松城跡』(末吉町)
4. 鹿児島県頤娃町教育委員会『頤娃城遺構確認調査報告書』
5. 鹿児島県知覧町教育委員会『堤之原遺跡』江戸前半
6. 『戦国の城・近世の城』新人物往来社
7. 當真嗣一「グスクの発掘」『東シナ海を囲む中世世界』新人物往来社 (下鶴 弘)

南九州城郭談話会役員名簿

会 長	三木 靖		
副会長	出口 浩	北郷 泰道	
顧問	五味 克夫		
幹 事	上東 克彦	岡本 武憲	栗林 文夫
	糸畑 光博	重久 淳一	下鶴 弘
	新東 晃一	鶴嶋 俊彦	中島 哲郎
事務局長	上田 耕		
会 計	福永 裕暁		
監 査	徳永 和喜	成尾 英仁	

【会員名簿】 (H8.2.25現在、手続きの方)

鮎川 哲	有川 孝行	有村 正巳
今給黎 孝子	今藤 憲司	今藤 昌代
入来院 重朝	入来院 貞子	上田 耕
上東 克彦	梅北 浩一	梅村 孝雄
榎田 英雄	大石 成久	岡本 武憲
門間 詔司	上別府 英昭	上村 純一
神脇 英和	川野 努	北垣 總一郎
木村 明史	栗林 文夫	黒木 昭三
糸畑 光博	坂上 友洋	猿渡 稔
重永 卓爾	重久 淳一	下鶴 弘
下松 正一	新宅 和正	新東 晃一
新町 正	千田 嘉博	大学 康宏
田中 昭実	玉利 秀子	帖佐 順子
帖佐 義堯	鶴嶋 俊彦	出口 浩
徳永 和喜	中島 哲郎	中島 健貴
永田 典男	成尾 英仁	西 昭三
野田 良治	橋口 亘	橋本 英俊
服部 英雄	浜添 時子	濱田 利安
原 時重	平井 広志	福田 泰典
福永 裕暁	福元 忠良	堀之内 清子
北郷 泰道	本田 憲証	前田 元紀
松尾 千歳	弥栄 博光	三木 靖
水渕 司	満園 房子	宮下 貴浩
宮原 景彦	柳原 敏昭	山口 慎吾
山口 路郎	山崎 勇三	山下 育男
山下 勘郎	山下 達郎	山下 政美
弓削 博義	湯田 京子	横山 哲英
吉永 正史	米澤 英昭	米永 健二
米永 保子	若松 重弘	渡部 茂昭

事務局便り

募 集 !

◎機関誌『南九州城郭研究』創刊号の原稿募集

1. 論文 400字×50枚程度(図版・註を含む)
2. 研究ノート 400字×20枚程度(図版・註を含む)
3. 史料紹介 400字×15~20枚

次回見学会・例会案内

日 時 平成8年3月20日(水)春分の日

集合場所 鹿児島県始良町立重富小学校前

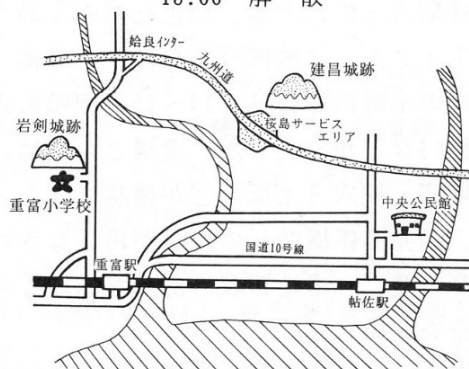
交通案内 日豊本線重富駅徒歩15分
九州自動車道始良ICより5分

会 順 (1) 見 学 会

- 9:30 集 合
 - 9:40 岩剣城跡見学
 - 11:20 建昌城跡見学
 - 12:00 昼食(始良町中央公民館)
- ※希望者は弁当を受け取ります。

(2) 例 会

- 13:00 研究発表・質疑応答
- 15:00 解 散



ついに、待望の会報第1号を出すことができました。昨年12月3日に、大口市で南九州の城郭を語る会として産声を上げてから3ヶ月。各地の城郭の情報、動向、次回見学会の案内などの情報を満載し、会員の皆様方の連絡誌として刊行されるものです。本誌へのお便り(会員通信)や近い内に発行を予定している機関誌『南九州城郭研究』創刊号の原稿も募集しております。

次号の会報発行は、5月中旬の予定で、原稿の締め切りは、5月10日です。下記まで。 (Shige)

重久 淳一 〒899-51 始良郡隼人町内山田1138-5

南九州の城郭 第1号

発行所 鹿児島県川辺郡知覧町郡17,880
ミュージアム知覧 上田 耕 方
南九州城郭談話会
(振替口座 02040-6-37850)

発行者 三木 靖
編集者 重久 淳一
印刷所 (株)トライ社
年会費1,000円 本号200円